

禪の興隆と山水畫の成立

鷺尾順敬

東洋に山水畫と云ふものがあつて、西洋にそれがない。今日になつて、西洋には風景畫と云ふものに、山景があり、水景がある。然かしそれは東洋の山水畫と云ふものと同じでない。東洋の山水畫と云ふものには大に由來があり、意義があると云ひたい。

支那には古く山水を吟詠してゐる。山水の趣味が鑒賞せられてゐるのである。これから山水畫と云ふものが成立し發達することゝなつたものであるが、唐に早く山水畫が成立してゐるが、宋になつて著しく發達したのである。宋には山水畫の名家が輩出した。それには必ず理由がなければならぬ。

實は日本に古くは山水畫といふものがない。平安朝時代の繪卷物等に描かれてゐる地理的の山川はあるが、それらは山水畫と云ふべきものではない。東寺、神護寺に傳つてゐる山水屏風せんずいは、山水を描いたものであるが、それは用途があつて山水の風景が描かれたものである。即ち灌頂の道場に立てられたものである。この屏風は決して山水の趣味が鑒賞せられて描かれたものでないから、決して山水畫と云はるべきものでない。

印度では、古く高山は神靈の棲息するところとなし、ヒマラヤの遠峰を宗教的に崇拜するのであるが、支那にも、この思想があつて五嶽を崇拜した。日本にもこの思想があつた。日本でこの思想を表現せられたものに、古く那

智山の瀑布の圖がある。これは宗教的の意義があり、直に趣味的に解釋すべきものでない。

宋時代の末から、山水畫が著しく發達したのは、山水の趣味を鑒賞することが盛になつたのに由來するものであることは明白な事實であるが、それは當時禪宗が興隆して、時代人心を教化し、自然界に對する觀察が、禪の宗意によつて刺戟せられたことから、山水畫の發達を促進するに至つたことが考へらるゝのである。この著大なる事實を閑却して、宋時代の末に山水畫の發達したことが説明せらるべきものでない。

佛教の大乘の教理には一色一香が中道に非るは無しと云ふのである。山の聳えるのも、水の流るゝのも法門であるとする。殊に禪宗では、這般の意義を強調し、自然界の形象が即ち一大法門であることを宣揚するものである。

宋の蘇軾が匡山廬に登り、夜中溪流の聲を聞いて大悟し、常總和尚に呈したと云ふ偈が傳へられてゐる。

谿聲便是廣長舌。 山色豈非清淨身。
夜來八萬四千偈。 他日如何舉似人。

この一偈は禪林に喧説せられてゐるのである。

道元禪師は早くこの偈を提示せられてゐることが見える。しかしこれが世間に知られたことは禪師の示寂の後であらう、當時必ず大に自然界の觀察を刺戟したことでなければならぬ。

金人劉中の龍門の石佛に題する詩がある。

鑿破蒼崖已失眞。 又添行客眼中塵。
請君看取他山石。 不費工夫總法身。

この詩は、禪僧が常に傳誦したものである。

我が五山の叢林にも早く知られてゐたもので、東福寺の禪僧大極正易は、この詩を傳誦し、此意義は誦文の闡梨の

知るところでないといふ破してゐる。龍門の蒼崖が人工を施さざるところ、總て法身であると云ふことは、誦文の閑梨即ち教宗人の知るところでなく、禪宗人にして始めて知るところであると云ふのである。

大覺禪師蘭溪道隆が宋から渡來し、始めて鎌倉に入つて粟船の常樂寺に留り、同寺で提示したと云ふ聯句があるが、即ち次の如くである。

(四) 鳥啼花笑觸目大士家風。 水遶山圍當處斯尊世界。

この二句には自然界に對する觀察が發揮せられてゐるのである。即ち鳥啼き花笑ひ、水遶り山圍む、この風景が大士の家風であり、斯等の世界であると云ふのである。

この主意は、禪宗で盛に提示するところである。しかし當時粟船の常樂寺では、この一聯は斬新警拔なる説示であつたもので大に注意せられたことであらう。

尋いで兀菴普寧ごつたんが宋から渡來して、北條時頼を接化したのであるが、時頼は親しくその接化を受けて、森羅萬象、山河大地、自己と無二無別なりと領悟したところを述べてゐる。

兀菴普寧は、乃ち

(五) 青々翠竹盡是真如、 鬱々黄花無非般若。

と云ふ古詩一聯を提示して讚歎してゐる。この一段の機縁は日本の禪宗の著大なる史實であるが、一面より見れば、日本の思想史上に注意すべきことである。即ち日本人の自然界に對する觀察がこゝに至つて全然革新せらるゝこと、なつたのであると云ふべきである。

翠竹黃花が皆眞如般若であると云ふことは、自然界に對する革新的の意義である。この様に自然界に對する觀察が新らしき意義を發揮したる所に、山水畫の著しき發達を見ること、なつたのであらうことは、決して理由のないことでない。

中世以後、漸次に盆石、盆景等が流行することゝなつたことが注意せらるゝが、これが同じく自然界に對する觀察が變遷したことに由るもので、即ち自然界を象徴したる盆石、盆景の趣味が鑒賞せらるゝこと、なつたのであらう。

この際、園藝が流行したもので、鎌倉の明月院の庭園をはじめ、山城の西芳寺、大徳寺、龍安寺等の庭園が、園藝の發達を實證するものであるが、これが皆同一の理由に依るものであることは否定せられない。

既に然れば、山水畫の著しき發達と云ふものが、禪宗の興隆に依つて、自然界に對する觀察の變遷に依りて發現したる一事實であると見ることは、極めて當然であらう。實際中世、山水畫が漸次發達したもので、それが皆禪僧に依つて作成せられてゐる。即ち當時山水畫の名家が皆禪僧である。それで禪宗から見れば山水畫を作成することが、即ち禪宗の法門を發揚することであらう。

紹等、周文等の山水畫から雪舟に至つて大に發達したものである。雪舟は如拙、周文を師承したることを言明してゐる。然かし雪舟の山水畫は禪僧雪舟の自得したものであると云ふべきである。相國寺の禪僧彦龍周興は、雪舟と同時代であるが、雪舟の自ら語るところなりと云ひ、次の如く云ふてゐる。曰はく、

(六) 大唐國裏無_レ畫師、不_レ道_レ無_レ畫、只是無_レ師、蓋泰華衡恒之殊、是大唐國之有_レ畫也、而其潑墨之

法、運筆之術、得_レ之之心、而應_レ之手、在_レ我不_レ在_レ人、是大唐國之無_レ師也。

これは如何にも禪僧雪舟の言である。大陸の泰、華、衡、恒の諸名山は即ち自然の名畫である。この自然界の趣味を領悟會得すべきであると云ふのである。

(七) 彦龍周興謂はく、雪舟昨大明に入り、錢塘金陵の江山、皆眼前の物にして、胸中の墨を吐き、眼前の境を幻す、亦宜ならずや、と。これ實に雪舟の山水畫を評隲したるものである。禪僧彦龍周興にしてこの言をなすことを得るのである。

(八) 萬里集九の記する所に依れば、雪舟は畫かんと欲する時、先づ平器の綠醜を斟んで、尺八を快吹すること數聲、和歌を唱へ、唐詩を吟じ、箕坐盤礴し、而して後、筆を吮り、墨を和し、紙に臨み、意氣揚々として龍の水を得たるが如きものあり、と。此の如く感興の動く所に作成せられ、水墨淋漓として靈氣活躍するを見るのである。畢竟するに禪僧雪舟の山水畫は自ら體得したる宗意禪味を發揚したものであると謂ふべきである。

實はこゝに東洋の山水畫と云ふものが成立したのである。山水畫は山水の形貌を描寫して萬事了したりとするものでない。今日日本で山水畫を描かんとする者が、一考せらるべきことでないか。

註 (一)正法眼藏 (二)說嵩 (三)碧山日錄 (四)常樂寺聯版 (五)元菴錄 (六)半陶稿 (七)半陵稿 (八)梅花無盡藏

此一篇は「畫說」に日本の山水畫と禪僧雪舟と題して發表したるものを、更に修正し、こゝに掲ぐることにした。本誌の讀者は自ら別なるべきを信ずるのである。